旭川
歴史と自然の表現力

巖谷　國士 Iwaya　Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全５巻。７月にはまた道央を旅する予定。

駅からまず西の近文地区へ直行した。北海道第二の都市・旭川はとにかく広いので、以前に来たときには行きつけなかったところだが、今回はレンタカー取材で音威子府へ向う前に、とくに希望して寄ってもらったのである。

旭川とはめずらしく和名だが、元はチュプペト（太陽・川の意で宛字は忠別）というアイヌの土地だったのを、明治中期にこう和訳したらしい。大日本帝国の旭日旗の含みもあったろう。1901年に陸軍第七師団が札幌から移って日露戦争の主力になるとともに、人口も急増し、1909年に札幌の道庁が焼けたときには、北海道中心部の旭川へ移転すべきだとの説が唱えられたほど、重要な拠点都市になっていた。

だがいうまでもなく土地のアイヌの歴史ははるかに古い。西方には聖地「神威古丹」があるし、縄文以来の遺跡も残っている。アイヌは明治初年、和人に石狩への移住を迫られたときには堂々と拒否した。だがチュプペトが旭川になるころ、ここ近文に集められて居住地とさせられたのだ。

近文の語源チカウンイプは「鳥のいる所」の意で、石狩川に面する大岩に鷹がいつもいた（いまもたまにいるらしい）ことをいう。現在はふつうの市街地だが、そのなかに103年前からひっそりと、「川村カ子トアイヌ記念館」が存続している。

川村カ子トは近文アイヌの首長だった。幼時に蒸気機関車に魅せられ、やがて測量技士になって鉄道敷設に携わった。知力・体力・統率力に秀で、宗谷本線や根室本線など北海道の鉄道測量の大半を、彼のチームが遂行していたという。引退してから私財を投じ、1916年にこの記念館を創設したのである。

広くはない敷地のなかに、アイヌに親しい自生植物に囲まれて、木造の控えめな記念館が立っている。近文に生まれたあの木彫家・砂澤ビッキ（1931－89）が新たに設計した展示館で、左には舞踊場のような平屋が連続している。

「川村カ子トアイヌ記念館」の正面。開設は1916年にさかのぼるが、1963年に火災に遭って新改築され、川村家の縁戚にあたる木彫家・砂澤ビッキが外装デザインを担当した。撮影：筆者

「川村カ子ト アイヌ記念館」の前庭に復元されているアイヌの住居「チセ」の内部。外は熊笹を多用しためずらしい建て方のものだという。　撮影：筆者

ビッキはこの地の生活と文化に育まれ、熊彫りからはじめてあの驚くべき自然木の現代的造形へと進んだ。かつて敷地に屹立させていた木彫の大作トーテムポールは、風雪をへて倒壊したけれども、記念館に記憶がのこっている。雑然とした展示場の隅に、異様な生物像の浮きあがる細長い木彫があって、「砂澤ビッキ」という手書きの札がついていた。

私設でもあり、社会の現状を反映してもいるのか、内部はあまり整備されていない。それでも展示品にはめずらしい物も多く、目移りしてしまうほどである。

木彫熊にも多様な形がある。もともと伝統的なものではなく、和人に定住と農耕を強いられた狩猟の民が収入源としてはじめた観光土産用の工芸だが、熊の姿形と生態ならお手のものだった。梟や蛇や鼬などの小さな木彫もおもしろい。

そうした森の動物たちの剥製もある。弓矢や刀や銛、祭具や生活用具も神話世界を反映していて、ときに怪奇でときにかわいく、特異な造形のセンスを感じさせる。

川村カ子トその人の展示コーナーもあった。豊かな顎髭を垂らす首長としての写真と、北欧の紳士のような技士としての写真とが対比されている。北海道だけでなく信州の飯田線の敷設でも活躍したことを知って驚いた。天竜峡に沿って南下するあの単線は相当の難所だったろう。

前庭にはチセ（アイヌの住居）が復元されている。この小屋での生活は最近の漫画『ゴールデンカムイ』でもおなじみだが、ここでは砂澤ビッキの回想記を引いておこう。

「[……] チセの真中に大きな炉があり、夏でも煮たきのためのたき火があった。しかし私はたき火が激しく音をたてて燃えさかる冬の季節を好きであった。冬の夜長を祖父のひざの中に抱かれながら熊狩りなどの話を聞き、祖母の懐ろに抱かれながら歌や民話を聞いた。子供心にたき火の炎のはぜる中からも勇壮なものや、哀調をもった歌声を見ることができたし、それは神秘な炎のゆらめきであったのを思い出す。」（「モシリの春」1973年、柴橋伴夫『風の王』による）

チセのなかに入ってみた。火はないが薪を積まれた炉が想像力を刺激する。「歌声を見る」という表現に魅かれる。聴覚と視覚の連続する原初的体験を、少年はここで蘇らせていたのかもしれない。

ふたたびアイヌを想う

私はその後にまた旭川を訪れ、こんどは市博物館を見に行った。アイヌ記念館を見たのだから、ここも見ないではすまされない。館長（2018年３月末退職）が縄文・アイヌの研究で知られる瀬川拓郎氏で、面識はないけれど、かねがね著書に親しんできたからである。

はたしてすばらしい展示だった。１階は「アイヌの歴史と文化」にかかわる。実物の展示はもちろん、住居や人体の模型で生活の有様を再現し、解説パネル、写真や映像、各種の地図を駆使している。若いころに来られたらよかった、と思えるような博物館である。

展示は旭川をふくむ上川盆地のアイヌだけでなく、北海道全土から本州、さらにオホーツク海をかこむ広大な領域にまで及ぶ。８世紀にいまの岩手県で大和朝廷軍の侵攻を阻止したという史実。11世紀にはサハリン（樺太）へ、13世紀には大陸へ、千島列島へ、15世紀にはカムチャツカ半島へ、活動圏が大きくひろがっていたことも、広範囲の歴史地図でわかる。

もちろんアイヌに限らずオホーツク沿岸諸民族の資料もあり、「日本」どころか国境もない広大な文化圏がイメージできるようになっている。

地下は「上川の自然と歴史」で、地質と動植物が中央を占め、両側には旧石器・縄文・続縄文・擦文・ア

「雪の美術館」にある氷のギャラリー。ショーウィンドーに似た透明な大窓が連続し、さまざまな氷の造形をくりひろげている。曇らぬように低温を保っているので、かなり寒い。
撮影：筆者

イヌ文化の出土品と、さらに明治以来の生活の資料も並んでいる。

とくに思いだされるのは１階の片隅に、知里幸恵（ちりゆきえ）のコーナーが設けられていたことだ。1903年に登別で生まれたが、近文のキリスト教伝道師だった伯母のもとで育ち、アイヌ最大・最後の叙事詩人といわれた祖母モナシノウクの口承を受けついだ女性である。金田一京助博士に才能を認められ、1923年に著書『アイヌ神謡集』が出版されるにいたるが、幸恵自身はその前年、同書の校正中に亡くなっている。まだ19歳だった。

死の直前の一文から引用しよう。100年近く前のものとは思えないアイヌの声が聞こえる。

「その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんという幸福な人たちであったでしょう。［……］その昔、幸福な私たちの先祖は、自分のこの郷土が末にこうした惨めなありさまに変ろうなどとは、露ほども想像し得なかったのでありましょう。」

氷雪と染織とパンと

旭川は私にとってまずアイヌを想う土地になっていたようだが、もちろん別の角度からも語れる。これまで親しんできたさまざまな作家・アーティストたちが生まれ育ち、また滞在した町だということもある。「日本と思えない」広々とした道路と家並や、北方内陸の気候・風土にも魅かれる。今回は妻と二人旅なので、相談して次の行先をきめることにした。

旭川にはユニークな観光施設のそろった町、という側面もある。全国３位の集客数を誇る旭山動物園や、ひところ話題になった「雪の美術館」など。とくに後者は世界に稀なところで、雪とその結晶を見せる美術館、というよりも資料館に近いらしい。

実際に旭川は雪の多い土地で、年間雪日数の平均値がなんと142.2日（理科年表2019）、全国一である。国内観測史上の最低気温－41℃も、第七師団移駐直後の1902年に記録した。近くの大雪山系の雪の結晶はもっとも美しいものとされる、等々、こういう施設のできる必然性はたしかにあった。

「北海道伝統美術工芸村」の門を入ると、目の前に洋式二階建で下部が煉瓦の館の正面がひろがり、広い敷地のなかの庭園や樹木も快い。右へ行くと、こちらはロシア風というのか、金色の丸屋根・三角屋根の塔の林立する正教寺院めいた白い建物があらわれ、多少キッチュの趣もあっておもしろい。ここが「雪の美術館」である。

内部は寒かった。まず「氷の造形」を見せる回廊に入ったからだ。両側のガラスのなかに本物の氷塊が育っている。ツララの束を垂らし、盛りあがり、迫（せ）りだし、随所に奇妙なフォルムを生む白い半透明のオブジェの有様は、まるで氷の鍾乳洞のようだ。美しい。

奥に「クリスタルルーム」と称する正多角形の部屋があり、天井から壁のガラス窓にかけて一面に、無数の雪の結晶図が浮かんでいる。気がつくと私たちしかいないので記念撮影を試みた。まさに観光客である。

さらに本来の資料館があり、厖大（ぼうだい）な研究資料を所蔵しているらしいのだが、いまは観光客の身なので、写真や映像をざっと見るにとどめた。

ここの順路は下へ下へと、雪の結晶をかたどる六角構造の螺旋階段を降りてゆくようになっている。バロック風の泉水もあり、西欧の宮殿を思わせる。降りきったところに広い真っ白なホールがひらけた。端に舞台があり、白いグランドピアノにハープ。客席の椅子が扇形に並んでいて、瀟洒（しょうしゃ）な音楽堂のようである。

ただ、両側に開かれている豪華な食堂や売店の様子から、じつは結婚式場なのではないか、と思われた。あいかわらず客は私たちだけ。演奏もないので無音に

近く、照明だけが煌々と明るい。どこか異星の宇宙船の内部にいるような気がしないでもなかった。

そのあと工芸村内の「優佳良織工芸館」と「国際染織美術館」も見た。前者は土地の材料を用いた新しい織物とその工程を見せる施設で、棟方志功の命名した「優佳良」はアイヌのユーカラ（叙事詩）を思わせるが、とくに直接の関係はないらしい。

後者は「日本唯一の染織専門美術館」とされるところで、展示も充実していた。東・南アジア、中東、北アフリカ、新大陸、そしてアイヌのものまで、衣裳や織物のコレクションが多彩である。

総じて本格的で国際感覚があり、模倣に終っていない。どこの国とも知れない漠とした感じもあるが、北海道、とくにその中心部の旭川の個性は、むしろそういうところにあるのかもしれない。

ついでに昼食をとったパン屋のことも記そう。市内の「道の駅」にある店だが、予想以上に旨かった。フランス式のクロワサンやブリオシュもドイツ式のブレートヒェンも本格的で、格好だけの真似事ではない。「道の駅」だというのに。私たちはそこで昼食を二度とったものだった。

旭山動物園を観光する

観光客夫婦として旭川に来ていて、旭山動物園へ行かないという法はない（たぶん）。妻の希望もあったので最後にここを訪れた。正面から入って坂道の先の階段をのぼる。意外に鄙びたアプローチだった。

だがここは有名な「奇跡の動物園」である。規模雄大なわけでも交通至便なわけでもなく、冷寒地だから冬は時間を限られたりもする。それなのに、2006年には年間入場者が300万人を超え、東京の上野動物園につぐ全国２位になった。2010年以後は名古屋の東山動物園に抜かれたが、以来ずっと３位である。東京や名古屋のような大都市ではなく、パンダやコアラのような珍獣もいないのに、どうしてこんなに人気があるのだろうか。

ひとつには日本に稀な「行動展示」のためらしい。動物の姿形ばかりでなく行動や生活の有様を見せる方式だ。動物が歩いたり泳いだり飛んだりする姿を目の前でくりひろげる。たとえば「もぐもぐタイム」と称して、動物の食事の様子を見せるショーなどはとくに大好評だという。

山の斜面で起伏が多いけれど、園内は広くないのでざっと一周できた。驚くような動物には出会わなかったが、「もぐもぐタイム」はさすがにおもしろい。ホッキョクグマ館の前で15分待ってから、子どもたち・観光客たちとともに地下に入ると、透明な大水槽のなかに餌が投じられる。北極熊は敏捷に反応し、水のなかで身をよじり反転し伸びあがり、餌をとらえて呑みこむまでの動きがすばやく、またいかにもユーモラスだ。とくにお尻を見せるときのかわいさは格別だった。

アザラシ館もすごい。地下に円筒形の透明水槽が直立していて、そのなかをアザラシが急降下してくる。餌をくわえると反転して一気に上昇する。地上ではイモムシ歩きしかしないアザラシが、急速度でダイナミックに行動するさまは感動的だった。

水中を意外なスピードで泳ぐカバに驚き、４種のペンギンたちの勝手気ままな散歩ぶりに共感する。私たち夫婦はもはや観光客以外の何者でもなかった。

ひととおり見てから高台に立つと、遠い山並が見わたされ、夕暮れ前の空が美しい。雲の切れ目に見える空の形が北極熊かアイヌの熊の横顔のようで、私たちの旭川の最後の思い出になった。

「旭山動物園」のホッキョクグマ館にて。大水槽のなかで餌を追いかけているところ。　撮影：筆者